

基盤研究 (B)

社会学のディシプリン再生と デュルケーム



目次

●本科研の概要	1
●第3回全体研究会の報告	3
●活動報告	7
●連載 玩味玩読デュルケームのことば 第4回	9
●学会報告	11
●お知らせ・今後の活動	12
●クロニクル	12

News Letter
vol.4
2017.1

4

このニュースレターは、科学研究費補助金基盤研究 (B)「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か——デュルケーム社会学を事例として」の研究成果を、活動報告や連載企画などを通して発信する媒体です。

本科研の概要

- 研究課題名 社会学のディシプリン再生はいかにして可能か——デュルケーム社会学を事例として
- 研究代表者 中島道男 (奈良女子大学)
- 研究分担者 13名 ●連携研究者 2名 ●研究協力者 12名 (平成28年12月現在)
- 研究種目と期間 基盤研究 (B) (15H03409)
平成27 (2015) 年度～平成30 (2018) 年度

●研究概要

社会学は、社会の変化に応じて学問領域を拡大・細分化することで発展してきたが、理論・方法が多様化し、研究対象が拡散するなかで、ディシプリンの固有性が揺らぎ、発信力や教育力の低下、学徒減少などの危機が生じている。この危機に根本から取り組むためには、社会学のディシプリンがどのように構築されてきたかを解明する「自己反省の社会学」の営みをさらに深化させなければならない。

そこで本研究は、ディシプリンの確立を成し遂げたデュルケーム社会学を事例として取りあげ、(A) 多種多様な"sociologie"論から制度的な「社会学」が成立した過程、(B) 学説の批判・再解釈を通じたディシプリン変容の過程を解明し、(C) 学説が各国でどのように受容され、教育プログラムに導入されたかを国際的な比較調査によって明らかにするとともに、(D) 我が国における社会学教育 (特に学説・理論教育) を調査し、新たな教育法や教材のモデルを開発・提示することによって、ディシプリンの再生に実践的に取り組むことを目的とするものである。

● 4つの班とメンバー

A班（起源解明チーム）

—ディシプリンの成立過程

【研究分担者】太田健児 [班長]（尚絅学院大学総合人間科学部教授）／小関彩子（和歌山大学教育学部准教授）／菊谷和宏（一橋大学大学院社会学研究科教授）／北垣徹（西南学院大学文学部教授）

【連携研究者】池田祥英（北海道教育大学函館校特任准教授）

【研究協力者】荻野昌弘（関西学院大学社会学部教授）／笠木丈（フランス国立社会科学高等研究院博士課程）

C班（国際比較チーム）

—各国の学説受容と教育化

【研究分担者】藤吉圭二 [班長]（追手門学院大学社会学部教授）／中倉智徳（立命館大学先端総合学術研究科非常勤講師）

【連携研究者】林大造（神戸大学キャリアセンター学術研究員）

【研究協力者】速水(小島)奈名子（神戸大学大学院人文学研究科研究員）／横井敏秀（大阪大学外国語学部非常勤講師）

B班（解釈史検討チーム）

—ディシプリンの継承・変容

【研究分担者】岡崎宏樹 [班長]（神戸学院大学現代社会学部教授）／江頭大蔵（広島大学大学院社会科学研究科教授）／中島道男（奈良女子大学大学院人文科学系教授） [研究代表者]／古市太郎（文京学院大学人間学部助教）／三上剛史（追手門学院大学社会学部教授）

【研究協力者】金瑛（甲南女子大学非常勤講師）／杉谷武信（日本大学文理学部社会学科非常勤講師）／溝口大助（日本学術振興会ナイロビセンター センター長）／村田賀依子（奈良女子大学大学院人間文化研究科博士研究員）／吉本惣一（横浜国立大学成長戦略研究センター研究員）

D班（社会学教育チーム）

—社会学教育法の開発

【研究分担者】白鳥義彦 [班長]（神戸大学大学院人文学研究科教授）／小川伸彦（奈良女子大学大学院人文科学系教授）／横山寿世理（聖学院大学人文学部准教授）／山田陽子（広島国際学院大学情報文化学部准教授）※ 29年度より研究分担者就任予定

【研究協力者】安達智史（近畿大学総合社会学部講師）／梅澤精（新潟産業大学経済学部教授）／川本彩花（京都大学学際融合教育研究推進センター研究員）

本科研の第3回全体研究会（デュルケーム／デュルケーム学派研究会の第33回研究会と共催）を下記のとおり実施しました。第2部では、本科研費研究に関するミニシンポジウムを開催しました。

- 日時：2016年10月22日（土）13:00～18:00
- 場所：奈良女子大学 文学系5棟128教室（奈良市）
- 参加者：24名（本科研メンバー以外の参加者も含む）
- プログラム：

第1部 自由報告

「デュルケーム／デュルケーム学派とガストン・リシャール」

池田祥英（北海道教育大学函館校）

コメンテーター：北垣徹（西南学院大学）

司会：江頭大蔵（広島大学）

第2部 科研関連報告ミニシンポジウム

テーマ「海外でのフランス社会学受容について——スペイン、韓国、台湾を事例に」

- ・「日程・概要など」 藤吉圭二（追手門学院大学）
- ・「スペイン調査について」 吉本惣一（横浜国立大学）
川本彩花（京都大学）
- ・「韓国調査について」 林 大造（神戸大学）
中倉智徳（立命館大学）
- ・「台湾調査について」 速水(小島)奈名子（神戸大学）

[藤吉が代読]

全体討議 司会：小川伸彦（奈良女子大学）

スペイン調査について

吉本惣一（横浜国立大学）・川本彩花（京都大学）

社会学の多様化・細分化が進む中で、社会学における共有知の希薄化は我々にとって等閑視できない課題の一つである。この課題に対し、考え得るアプローチはいくつかあるが、デュルケーム、ジンメル等、いわゆる古典と呼ばれるものに立ち戻り、それらを現代と結びつけなおすことは、その中でも有効な手段の一つといえるだろう。そのための糸口として、バルセロナにおいて、社会学の古典がどのように用いられているのかを、現地の社会学者たちに質問した。

今回の調査(2016年2月21日～28日)では、Universitat Oberta de Catalunya (onlineによる大学)、Universitat Autònoma de Barcelona (スペインの大学では最高ランクの大学)、Universitat Abat Oliba CEU (カトリック系キリスト教大学)の三大学を訪問し、各大学に所属する三名¹にインタビューすることができた。バルセロナの大学共通の社会学教育指導要領は存在しないものの、学生の就職という観点からも、理論よりも実践的な側面(例えば社会調査)が重視される傾向にある。そのため、古典を扱うには、現代社会といかに結びつけられるかが重要となってくる。したがって、古典の「正統的」解釈よりも、現代という視点から、その有効な部分を篩い分け、使える部分と使えない部分を明確にしていく必要がある、などの状況報告を吉本が行なった。

続いて川本報告では、上述のスペイン調査のさらなる内容紹介と、それをふまえて本科研で取り組みたい研究について報告を行なった。

まず、スペイン調査の内容としては、とくに Universitat Oberta de Catalunya にて行った日本における社会学教育に関する発表(学部時代にどのような社会学教育(とくに社会学の古典)を受けたか、現在の自分の研究にどのような影響があったか)と、それに対するコメントに焦点を当てて報告した。また、社会学教育に関する情報・意見交換(学生(学部生)に社会学の古典をどのように教えているか)において得られた、スペインでの社会学教育のあり方の一端についても紹介した。次に、今回のスペイン調査をふまえて本科研で取り組みたい研究テーマとしては、「西洋と社会学／日本と社会学」を提示した。具体的には、西洋で生まれた学問である社会学の理論・学説が教えられる際、その理論・学説のもつ地域性や時代性、およびその理論・学説を主張した人の個人的背景(パーソナル・ヒストリー)などはいかに扱われているのかについて、当面は日本の社会学教育を対象に検討するという課題である。さらに本報告では、研究方法や現時点での結果、今後の展望等についても提示したため、これからさらに検討を進めていきたい。

1 Natàlia Cantó Milà (Universitat Oberta de Catalunya)

Swen Seebach (Universitat Autònoma de Barcelona)

Miguel Franquet dos Santos (Universitat Abat Oliba CEU)

なお、今回の調査はバルセロナにおいて実施したので、マドリードなどでの状況は異なる可能性がある。

韓国調査について

林大造（神戸大学）・中倉智徳（立命館大学）

本報告では、2016年9月17日に実施したキム・ミョンヒ（金明姫・Kim Myung-Hee）先生（建国大学統一人文学センター研究教授）への、韓国でのデュルケーム受容をめぐるインタビュー調査結果について報告した。キム先生は博士論文でマルクスとデュルケームを社会学史・理論史として論じられて以来、デュルケーム理解の更新とその現代的応用に努められ、とくに社会学的トラウマ理論から、自殺や被害者に関する研究をされている。強く印象に残ったのは、キム先生が、深いデュルケーム愛と理解とに基づいた実践的な応用を一貫してなされていることである。デュルケームの前期／後期という区別をあえてせず、「一つのデュルケーム」として理解し、社会科学を自然科学へと還元する還元主義に対抗するために、デュルケームの科学認識論を、創発概念に着目しつつ、非還元的階層性をもった批判的实在論の基礎理論として解釈しておられた。この立場は理論的なものだけではない。彼女は「九老（クロ）市民センター」の創設などの市民運動への参加や、さらには韓国政府の自殺対策の委員会やセウォル号沈没事故の研究プロジェクトの審査など、実践的な活動にも関わっている。とくに自殺対策について、心理現象（うつや報道による模倣）や経済現象（不況）といった還元主義的な理解と対策が中心であったのに対し、自殺をそれらに還元しえない社会学的な現象としてとらえ、むしろ家族を含む社会的な紐帯をどのように再活性化するかが課題であるという立場から、自殺対策の変更を政府の委員会において提言されている。このような新たなデュルケーム理解に基づいた政策提言を行なうキム先生の姿勢は、社会学のディシプリン再生を目指す私たちの科研の重要な参考となるのではないか。

最後に韓国の状況について言及しておく、やはり理論社会学は危機的狀態にあり、とくにデュルケームおよびフランス社会学の受容は不十分であるとのことであった。デュルケームの著作の訳出も最近になってからで、1990年に『自殺論』（完訳版）が訳出されたのが最初であり、2012年に『社会分業論』が刊行されたことで、ようやく主著の完訳がそろそろような状況であった。ただ、ベラーの弟子で延世大学のパク・ヨンシン氏の元でデュルケーム研究を行なった院生が多く輩出されたほか、『社会分業論』の訳者ミン・ムンホン氏らの活動によって、デュルケームの再評価の機運が高まりつつあるようだ。キム先生も博士論文、そして自殺論に関する著作が刊行予定である。今後は日韓のデュルケーム研究を連携して進めていくといった新たな展開もみえてくるような調査となった。

台湾調査について

速水(小島)奈名子(神戸大学)

京都大学東南アジア研究所客員研究員として日本滞在中の蕭新煌教授(Professor Hsiao Hsin-Huang)に速水がインタビューを実施し、台湾におけるデュルケーム理論の受容について聴取りを行なった。蕭教授は国立台湾大学社会学部教授で、中央研究院(台湾)社会学科特聘研究員もお務めである。実施形態は以下の通り。

日時: 2016年1月6日(水) 13:30-14:50(本科研の説明も含めて80分)

場所: 京都大学東南アジア研究所 使用言語: 英語

質問は大きく、①台湾におけるデュルケーム理論受容について、②台湾社会学におけるデュルケーム理論の位置づけについて、③台湾と中国におけるデュルケーム理論受容の比較について——以上3点に集約できる。以下、質問への回答を摘記する。

①台湾におけるデュルケーム理論受容について

デュルケームが古典社会学理論の重要人物の一人として取り上げられることはもちろんだが、授業で取り上げる際の比重はそれほど大きくない。はじめの1コマで紹介する程度で、授業を通じて彼の理論を分析・熟考したという例は、私の教え子である宗教社会学者がデュルケーム理論を取り上げた授業以外には稀だと思う。デュルケームは間違いなく社会学理論の基礎を築いたが、台湾ではむしろ彼は経験的調査のための方法論の基礎を築いた人物と捉えられている。彼が実際に用いた方法論を研究者や学生が自らの調査研究に応用するということがよくなされてきた(参考: 国家図書館での論文タイトルデータ検索: <http://ndltd.ncl.edu.tw/>)。

②台湾社会学におけるデュルケーム理論の位置づけについて

上にも述べたように、台湾では実践的な関心で社会学に取り組む場合が多い。1960年代にアメリカ社会学の影響を強く受ける中で成立した台湾の社会学は、他民族の自立と共生という台湾の歴史と現状に取り組んできた。台湾社会の構造そのものを分析するための経験的調査およびその方法論の洗練がそこでの使命とされた。台湾の社会学のこうした姿勢には、確かにアメリカ経由の社会学の伝統を受け継いだという背景があるように思われる。

③台湾と中国におけるデュルケーム理論受容の比較について

これについて詳細まで語ることは難しいが、まずスタートが台湾と中国では異なる。中国では1980年代から社会学の基礎が築き上げられた。中国は「マルクス熱」の強い地域だが、マルクスの思想は社会学の範疇を超え、社会思想として受け入れられた。社会学の成立にあたってデュルケームの理論も紹介されたが、その理論研究が活発とは言えない。中国ではアメリカ社会学をそのまま受け入れることにも抵抗があるため、独自の調査方法論が展開されており、デュルケーム理論への関心は台湾よりも低いと思う。

以上の回答を得る過程で興味深い指摘もなされた。台湾では経験的調査と分析が活発で、批判理論への関心も高く、ディシプリンが揺らいでいることは日本と同様だが、そこで「社会学の危機」が強調されることは少ない。この点について日本の状況への関心が示された。

(なお、本報告文は速水の発表原稿を藤吉が要約し、速水の下承を得たものである。)

2016 D班（社会学教育チーム）2016年度第2回班別研究会

日 時：2016年8月28日（日）13:30～18:00

場 所：神戸大学文学部・大学院人文学研究科C棟4階C462共同談話室（神戸市）

出席者：5名

内 容：小川伸彦「<デュルケーム命題集>刊行計画について」

梅村麦生「社会学の方法論と主題設定に関わるデュルケーム——社会学史・社会学概論・社会学理論のシラバスから」

横山寿世理「国内社会学教科書におけるデュルケーム社会学の変遷」

川本彩花「社会学教科書における理論・学説の教授法——デュルケーム学派を中心に」

白鳥義彦「日本およびフランスの社会学教科書におけるデュルケームの取り上げられ方」

2016 B班（解釈史検討チーム）2016年度第2回班別研究会

日 時：2016年9月24日（土）13:00～17:00

場 所：キャンパスプラザ京都 第2会議室（京都市）

出席者：10名

内 容：三上剛史「『贈与論』の問題圏と“贈与”の神話——MaussからMAUSSへ」

中島道男「社会学のディシプリン再生——バウマンのデュルケーム批判を出発点に」

2016 2016年度第2回全体会議

日 時：2016年10月23日（日）10:30～12:20

場 所：奈良女子大学文学系N棟339室（奈良市）

出席者：14名

内 容：各班の進捗状況報告や国際シンポジウムのプログラム案などの検討、『デュルケーム命題集』（仮題）や最終報告書の刊行計画などについて協議しました。

2016 2016年度第1回編集会議

日 時：2016年10月23日（日）13:30～15:15

場 所：奈良女子大学文学系N棟339室（奈良市）

出席者：10名

内 容：『デュルケーム命題集』（仮題）の構成について検討しました。

2016 D班（社会学教育チーム）2016年度第3回班別研究会

日 時：2016年12月10日（土）13:30～19:00

場 所：神戸大学文学部・大学院人文学研究科C棟4階C462共同談話室（神戸市）

出席者：5名

内 容：川本彩花「社会学教科書における理論・学説の教授法」

横山寿世理「国内社会学教科書におけるデュルケーム社会学の受容——「社会」と「近代市民社会」

白鳥義彦「社会学教科書に関する研究レビュー ——『社会学評論』Vol.56（2005-2006）No.3「特集・テキストに映し出される社会学の知—大学の大衆化とテキスト革命—」をもとに」

梅村麦生「ドイツの大学における社会学史・社会学理論とデュルケーム——ビーレフェルト大学ほかのシラバスを例に」

小川伸彦「索引の中のデュルケーム——装置としての教科書から〈古典化〉プロセスを解読する手法について（1）」

2016 A班（起源解明チーム）2016年度第1回班別研究会

日 時：2016年12月17日（土）13:00～17:00

場 所：一橋大学大学院・社会学研究科 社会学共同研究室会議室（東京都国立市）

出席者：7名

内 容：荻野昌弘「分業の起源を問う——『社会分業論』を起点として」

小関彩子「デュルケーム認識論の外に立つデュルケーム」

2016 B班（解釈史検討チーム）2016年度第3回班別研究会

日 時：2017年1月7日（土）13:00～17:00

場 所：キャンパスプラザ京都 2階ホール（京都市）

出席者：10名

内 容：金瑛「デュルケーム学派と心理学——デュルケームとアルヴァックスを中心に」

古市太郎「贈与と社会性（le social）——贈与論の継承と展開」

この連載では、毎号、デュルケームの言葉をいくつかとりあげます。今号のように、デュルケームをめぐる言葉も取り上げることがあります。

周知の、そして未知のデュルケームへの扉を読者のみなさんが開くよすがとしていただければ幸いです。

※ 訳文は参考に掲げた邦訳書とは異なる場合もあります。

●ことばんごう no.10●

これらの（ダーウィンによる）仮説は道徳生活の本質的要素を捨象してしまっている。つまり、社会がその成員たちに課して、生存のための闘争や自然淘汰というむきだしの活動をやわらげ、中和する、あの調整力というものを考慮に入れていない。ところが、社会が存在するところでは、どこにでも愛他主義がある。そこには、連帯があるからである。

<< Elles (les hypothèses de Darwin) font, en effet, abstraction de l'élément essentiel de la vie morale, à savoir de l'influence modératrice que la société exerce sur ses membres et qui tempère et neutralise l'action brutale de la lutte pour la vie et de la sélection. Partout où il y a des sociétés, il y a de l'altruisme, parce qu'il y a de la solidarité. >>

() 内は引用者による

【ミニ解説】

『社会分業論』は社会学の古典のひとつであり、左記のことばにはデュルケームの社会観が現れている。

この箇所では、まず個人あるいは利己主義が出発点にあり、生存競争と自然淘汰の結果、社会に秩序がうまれるというスペンサーの社会進化論あるいはその基となる思想・ダーヴィニズムが批判されている。

このような批判が可能なのは、社会が個人あるいは利己主義からなるのではなく、そこに存在する連帯および愛他主義が社会生活の根本的基礎にある、とデュルケームが捉えているからだ。この立場に基づき、未開社会あるいは近代社会における「機械的連帯・有機的連帯」という彼独自の連帯論が展開されている。

また、デュルケームが捉える個人主義とは歴史的発展からうまれるというものであって、単純な「個人 vs 社会」という二項対立的立場や「社会实在論」に陥っていない。

近年では、「連帯経済論」や「社会包摂論」が注目を浴び、それらの水脈の一つに、デュルケームの連帯論も位置付けられている。このように、連帯は、社会を読み解く際の有効な基礎概念のひとつとなっている。

(古市太郎 記)

【キーワード】

連帯、社会、個人主義

【出典】 E.Durkheim, *De la division du travail social*, [1893]2013 (Quadrige/Presses Universitaires de France 版 p.174)

(邦訳)『社会分業論』現代社会学体系 2・青木書店、田原音和訳、1971年、191頁。

●ことばんごう no.11 ●ズィヤ・ギョカルプのことば

集合表象 (maş'eri ter'iler) は、沸騰的危機 (galeyanlı buhranlar) の時期には、極めて強力な忘我的熱狂 (vecitler) を喚起する円光に身を包むことによって、最大のエネルギーと威力を獲得する。集合表象はその時まことの「理想 (mefkûre)」となる。集合表象は、それが理想と化して初めて、真の革新 (inkılâplar) の動因となるのである。

<< Maş'eri ter'iler, galeyanlı buhranlar esnasında gayet şiddetli vecitlerle halellenerek son derece büyük bir kudret ve kuvvet iktisap ederler. Maş'eri ter'iler, asıl mefkûre halini aldıktan sonradır ki, hakikî inkılâpların âmili olurlar. >>

【ミニ解説】

ズィヤ・ギョカルプ (Ziya Gökalp, 1876-1924) は、近代トルコ最大の思想家(一時期イスタンブール大学教授)として、トルコ・ナショナリズムを定式化し、ケマル・アタテュルクによるトルコ革命に思想的基礎づけを提供した人物である。同時代人デュルケームの社会学に深く傾倒したギョカルプは、社会学をナショナリズムと近代化に寄与する中心的科学とみなし、デュルケームの移植と制度化に力を尽くした。彼はデュルケームの言説のうちに、集合的「理想」の出現メカニズムと役割についてのアイディアを基礎とする革新的社会変動の理論枠組を読み取り、国家新生の陣痛のさなかにあったトルコ社会に適用しようとした。デュルケームを静態的・秩序志向的ではなく、理想主義的文脈において動態論的に読み込み、摂取することに向けられた彼の試みは、その後本家の欧米学界を長らく支配する、「保守主義的」デュルケーム像の対極に位置するものである。それは、デュルケーム・ルネサンスの到来により、例えばティリヤキアンらによって「発見」された「沸騰論的な」デュルケーム像との親縁性

さえ感じさせる斬新さをもつ。その思考において、時としてショッキングなほどナイーヴな一面をのぞかせるギョカルプではあるが、ここに引用した一節は、彼の社会学的直観の鋭さ、確かさを雄弁に物語るものといつてよい。

(横井敏秀 記)

【キーワード】

ズィヤ・ギョカルプ、理想、集合的沸騰、動態論的アプローチ

【出典】 *Türkçülüğün Esasları* (『トルコ主義の諸原理』), 1923 (Varlık Yayınevi 版 pp. 50-51)

●国内学会

- * 杉谷武信「デュルケムの『道徳の科学』についての試論——『内在的事実』と『外在的事実』の関係を中心に」（2016年度日仏社会学会大会自由報告、2016.11.19 於関西大学）
- * 村田賀依子「ハビトゥスと潜在性（potentialité）——実践と状況の関係をめぐる考察」（2016年度日仏社会学会大会テーマセッション報告、2016.11.19 於関西大学）

●国際学会

- * Ayako Ozeki "Durkheim standing outside of Durkheimian epistemology", 3rd ISA Forum of Sociology, 2016.7.12 University of Vienna

Durkheim standing outside of Durkheimian epistemology（要旨）

小関彩子（和歌山大学）

2016年7月12日、ウィーン大学における3rd ISA Forum of SociologyのRC25 Language and Society Session: Sociological Studies of Language 部会に参加し、Theory & Method セッションにて、Durkheim standing outside of Durkheimian epistemology というタイトルで発表を行った。報告内容の概要は以下の通りである。

まず第1章では、デュルケムがカテゴリーをどのように位置づけていたのかを明らかにした。ここでは、彼が最終的には客観的で普遍的な真理の存在を否定し、カテゴリーという認識の枠組みを相対化するに至ると結論づけた。

その上で第2章では、デュルケム自身が社会を認識するに際して採る、その立ち位置を検証した。そして、彼の認識論批判が彼自身に向けられた場合に帰結する、その矛盾を指摘した。デュルケムにとってカテゴリーとは、集合意識が対象を表象する、そのしかた、様式のことである。そして、社会学者たるデュルケムは、そのような表象の様式を「観察」している。しかしながら、そのような観察者たるデュルケムの得た認識もまた、彼が構成したものなのではないだろうか。

デュルケム自身は彼が解明した認識論の枠組みの外に立ち、あたかも超越論的主観性を持っているかのような立ち位置から社会的事象を「科学的」に観察・記述できると主張しているように見えるが、しかしその根拠は示されていない。報告者の提示したこの図式に対して、報告後、会場の数人の参加者から、賛同の意が表された。

お知らせ・今後の活動

● 訃報

2016年8月20日、研究分担者（解釈史検討班）の飯田剛史教授（大谷大学文学部）がご病気のためお亡くなりになりました（享年66）。デュルケームの理論研究のみならず在日コリアンの宗教とまつりの研究で大きな功績を残された飯田先生の早すぎるご逝去を悼み、謹んでご冥福をお祈りいたします。（事務局）

● 第4回全体研究会（デュルケーム／デュルケーム学派研究会と共催）

日 時： 2017年4月15日（土）午後
場 所： 文京学院大学（本郷キャンパス）
内 容： 本科研費研究関連としては、社会学教育チームによる報告が予定されています。詳細が決定しましたら本科研のウェブページに掲載いたします。
備 考： 参加を希望される非会員の方は、下記までご一報ください。
デュルケーム科研推進事務局 durkheim2017@gmail.com

※ 研究会の内容は一部変更される場合もあります。

● ウェブページのお知らせ

本科研のウェブページのURLが変わりました。ニュースレターのバックナンバーも読めますので、ぜひご利用下さい。

新 URL : <http://fjosh524.in.coocan.jp/discipline/>

クロニクル 2016年7月～2017年1月

■ 2016年

7月7日（木） 部内報第14号配信
7月15日（金） ニュースレター第3号発行
8月7日（木） 部内報第15号配信
8月28日（日） 社会学教育班2016年度
第2回班別研究会（神戸市）参加者5名
9月1日（木） 部内報第16号配信
9月24日（土） 解釈史検討班2016年度
第2回班別研究会（京都市）参加者10名
10月6日（木） 部内報第17号配信
10月22日（土） 第3回全体研究会（奈良市）参加者24名
10月23日（日） 2016年度第2回全体会議（奈良市）
参加者14名

10月23日（日） 2016年度第1回編集会議（奈良市）
参加者10名
11月10日（木） 部内報第18号配信
12月1日（木） 部内報第19号配信
12月10日（土） 社会学教育班2016年度
第3回班別研究会（神戸市）参加者5名
12月17日（土） 起源解明班2016年度
第1回班別研究会（国立市）参加者7名

■ 2017年

1月7日（土） 解釈史検討班2016年度
第3回班別研究会（京都市）参加者10名
1月12日（木） 部内報第20号配信

編集後記

「社会学のディシプリン再生とデュルケーム」第4号をお届けします。今号では、10月の第3回全体研究会の報告や研究活動の報告を掲載しています。次号では、4月の第4回全体研究会の様態や、今年度の研究報告などをお届けする予定です。

科学研究費補助金基盤研究（B）

「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か——デュルケーム社会学を事例として」ニュースレター第4号

発行日：2017年1月15日

編集発行：デュルケーム科研推進事務局

〒630-8506 奈良市北魚屋西町 奈良女子大学文学部 中島道男研究室内

E-mail: durkheim2017@gmail.com

HP: <http://fjosh524.in.coocan.jp/discipline/>